

## インドネシア人の看護師・介護福祉士候補者の来日 動機に関する予備的調査：西日本の病院・介護施設 での聞き取りから

クレアシタ  
九州大学大学院人間環境学府人間共生専攻共生社会学コース：大学院生

<https://doi.org/10.15017/17938>

---

出版情報：九州大学アジア総合政策センター紀要. 5, pp.193-198, 2010-06-30. Kyushu University  
Asia Center  
バージョン：  
権利関係：



# インドネシア人の看護師・介護福祉士候補者の来日動機に関する予備的調査 — 西日本の病院・介護施設での聞き取りから —

A Preliminary Study on Indonesian Nurse/Certified Care Worker Candidates and Their Motives to Work in Japan: The Results of Interviews with Indonesian Candidates Assigned in Hospitals and Care Facility in Western Japan

クレアシタ

(九州大学大学院人間環境学府人間共生専攻共生社会学コース)

KREASITA

(Graduate Student, Graduate School of Human and Environment Studies, Kyushu University)

## Abstract

After the Japanese Diet has approved the bilateral Economic Partnership Agreement (EPA) between Indonesia and Japan, in August 2008, Indonesia government has sent the first cohort of 208 nurses to work in Japan as nurse and care worker candidates. The paper first discusses the motivation of Indonesian candidates, who are placed in hospitals and long-term care facility in Western Japan through qualitative research. According to the quantitative research by Kyushu University Research Team, the major motivations for Indonesian candidates coming to Japan are 'to develop their carrier' and 'to economically support their families'. How are these two major motivations being understood by the candidates? Secondly, this paper attempts to make a preliminary study on the correlation between their working motives and their long-term tendency in settlement. As a result, there are candidates whose motives are inextricably connected between 'carrier development' and 'supporting their families' as these two are not understood as exclusive categories. Furthermore, it has been suggested that 'supporting their families' serves as an important factor for the candidates in considering their long-term settlement in Japan.

Key word : Indonesia-Japan EPA, Motives to Work Abroad, Tendency in Settlement, Nurse and Certified Care Worker Candidates.

## 要旨

経済連携協定 (EPA) に基づいて208人のインドネシア人看護師・介護福祉士候補者が2008年8月以降来日した。本稿は、第1に、西日本の病院・介護施設に配属になった第1陣のインドネシア人候補者を対象とした質的調査により、来日動機を明らかにすることを目的とする。九州大学研究班による量的調査によれば、「キャリア形成」と「家族を経済的に支援すること」が主要な来日動機となっている。候補者にとって、この2つの動機はどのように理解されているのだろうか。第2に、このような来日動機と将来的な定住化傾向との関連を探ることで、インドネシア人看護師・介護福祉士候補者が海外で働く動機からみた定住化傾向に関する予備的な考察を試みた。その結果、「キャリア形成」と「家族支援」が密接に結びついた来日動機を持っている候補者もあり、定住化要因としては「家族支援」が「キャリア形成」よりも大きいことが示唆された。

キーワード : 日本・インドネシア経済連携協定 (EPA)、来日動機、定住化傾向、看護師・介護福祉士候補者

## 1. はじめに

インドネシアと日本の間のEPA<sup>1</sup>は2007年8月20日に両国首脳によって署名され、日本の国会の承認(2008年5月16日)を経て、2008年7月1日に発効した。これにより、2008年度からインドネシア人看護師・介護福祉士候補者の受け入れが開始された。協定では、インドネシア人看護師等の円滑かつ適正な受け入れの実施ため、日本への入国及び一時的な滞在が許可されるインドネシア人候補者の最大人数を定めることとしている。当初2年間で看護師候補者400人、介護福祉士候補者600人を受け入れ最大人数として定め、2008年8月には協定に基づくインドネシア人候補者の第1陣として208人(看護師候補104人、介護福祉士候補104人)を受け入れた。

筆者もメンバーである九州大学研究班は、2009年1月に国際交流基金関西センターの協力により、来日第1陣のインドネシア人介護福祉士候補者に対するアンケート調査を、限定的ではあるが実施している(安立、クレアシタ、2009)。また、2009年8月には、現地での日本語研修事業を担当した株式会社ヒューマンリソシアの協力を得て、来日第2陣のインドネシア人看護師・介護福祉士候補者のほぼ全員に対するアンケート調査を、バンドンにおける日本語研修期間中に実施した<sup>2</sup>。

この2つのアンケート調査は、ほぼ同一の項目を用いたアンケート調査票を用いた自己記入方式の集合調査である。来日した動機を複数回答で選択してもらったところ、インドネシア人看護師・介護福祉士候補者たちは、「自分のキャリアをのびたいから」、「家族を経済的に支援したいから」、「日本の文化に関心があるから」、「日本の高度先端技術を勉強したいから」などの項目については8割以上が肯定的な回答をした。その一方で、「応募時点で仕事がなかったから」、「インドネシアでの給与に満足できなかったから」、「日本で既に生活している、家族や親戚がいたから」、「日本に働きに行くことを家族から勧められたから」などを肯定した回答は相

対的に少なかった。来日第2陣のインドネシア人介護福祉士候補者の第1の来日動機に関する調査では、「自分のキャリアをのびたいから」が最も多く、次いで「家族を経済的に支援したいから」と答えた者が多かった(安立、2010)。

本稿の第1の目的は、上記の量的調査の結果を出発点として、第1陣のインドネシア人候補者を対象として、来日動機を質的調査により明らかにすることである。アンケート調査によれば、「キャリア形成」と「家族を経済的に支援すること」が主要な来日動機となっている。候補者にとって、この2つの動機はどのように理解されているのだろうか。第2に、このような来日動機と将来的な定住化傾向と間の関連を探ることで、インドネシア人看護師・介護福祉士候補者が海外で働く動機からみた定住化要因に関する予備的な考察を試みたい。

## 2. 研究方法

2009年2月から2009年12月の間に、第1陣のインドネシア人看護師候補者・介護福祉士候補者の受け入れ病院や施設で、訪問調査をしながら看護師候補者や介護福祉士候補者に対してインドネシア語でインタビュー調査を行った。受け入れ病院や施設は西日本にある病院6カ所と介護施設1カ所である。インタビューを行ったインドネシア人看護師候補者は15名で、介護福祉士候補者は2名である。17名のうち、女性は10名、男性は7名である。

## 3. インドネシア人看護師・介護福祉士候補者が日本で働く動機について

アンケート調査結果で示されたように、病院や施設で行った聞き取り調査からも「家族を経済的に支援」および「キャリア形成」を目的として日本で働くことを決意した候補者が多い。その中からいくつかの代表的な事例を彼らの語りを含めて紹介しながら、それぞれの祖国での事情や来日理由などを論じていきたい。

1 EPA(経済連携協定)とは、FTA(自由貿易協定)を中心に、人の移動やサービス、投資ルールの整備など幅広い分野で相手国や地域と通商ルールの定める協定。

2 現地での日本語研修を免除された数名の候補者については、アンケート調査から外れている。

### 3.1 家族の経済的支援の動機が強い候補者

#### 事例1. 病院に配属のAさん（女性、看護師候補者、33歳、既婚）

家族を経済的に援助するために、日本で働きたいと思った。実はこのEPAのプログラムを知ったのは偶然だった。第一目の日本で働くインドネシア人の候補者は全員健康診断を受けなければならない。保健省は私が働いていた病院を健康診断を受ける場所として選んだ。健康診断課に勤めていた私は、彼らからEPAについての情報もらった。EPAプログラムに申し込んだら、合格と判断され、とても嬉しかった。夫の許可を得て、日本で生活し始めた。夫はビジネスマンだから、毎月の収入がはつきりしない。

私がいま日本で頑張っているのは、夫や子供は故郷に帰ることができ、両親と一緒に住めるようになった。今、彼らを支えているのは私だけだ。給料的には日本のほうがかなり良いから、出来れば長く日本で働きたい。国家試験の免許があると日本で長く働けるから一生懸命日本語を勉強して、日本の国家試験に受かって、日本の病院で看護師として働きたい。母国の病院では健康診断課に勤めていた。いつも機械を動かす仕事をやっていたから、患者さんと接する機会があまりなかった。日本に来て、お年寄りの患者さんを介護するのをうれしく感じている。私にとって、患者さんは自分のおばあちゃんのような存在だと思う。

事例1のAさんは6人兄弟の長女として夫や子供だけでなく、自分の両親も養うため、日本で働くことにした。来日してしばらくの間、候補者側は給料や契約の問題にとっても不満があったため、彼らの間で大騒ぎになったことがあった。

当初は夢を抱き、目標を定めて移住するのであるが、契約の不備による見込み違いや計算違いもある。Aさんも同じような気持ちを感じたが、後ろにいる夫、子供や両親の姿があるため、Aさんは我慢して、仕事に夢中になることを決意した。日本語の壁もあるが、国家試験に受かるように、毎日日本語の勉強を頑張った。その

結果、全国の看護師候補者を対象とした国家試験の模擬試験で、Aさんの得点は3位になった。Aさんだけでなく、受け入れ病院側もその結果を見て大喜びだった。病院側はとてAさんに期待していたので、Aさんも長く働き続けられるように努力することを誓った。

#### 事例2. 病院に配属のBさん（男性、看護師候補者、30歳、既婚）

日本の進んだ医療・看護師技術を学べるのも魅力だが、日本に行けば月に20万円は稼げると聞いたからこのEPAのプログラムに参加することにした。妻と2人の子供を残して日本で看護師として働きたいと思った。日本は物価が高いが、日本で暮らすのはとても便利で楽しい。もし国家試験に受からなければならぬという条件がなかったら、家族を呼んで一緒に日本で暮らし続けたい。

しかし、今の状況を考えると受かるのは無理だと思う。今は残り時間を楽しく過ごしていっぱい良い思い出をつくりたい。

事例2のBさんは来日する前に地域医院で非常勤看護師として働いていた。後1-2年間働いたら公務員になれる可能性が高いのに、日本で働けば月20万円も稼げると思い、EPAの日本の受け入れに申し込んだ。しかし、日本に来て、契約書に書かれた給料の金額から税金や保険料が引かれるということや病院に配属された後でも、日本の看護師資格を持っていないので、看護補助者としてしか働けず、看護師より少ない看護補助者の給料しかもらえないということを知って、Bさんはとてもショックだった。毎月10万円程度母国にいる家族に送金が出来ると思っていたが、今の給料だとぎりぎりの生活しかできないという。

EPAの協定の中で、両国とも「インドネシア人看護師・介護福祉士は日本人と同等の給料がもらえる」と合意し、インドネシア政府は最低賃金の保証を求めたが（看護師は月に20万円、介護福祉士は月に17万円）、日本政府は給料のことは各病院や施設が決めることとして、その要請に応じなかった。

「もし日本に来なかつたら、たぶん今ごろ私

は公務員になれていた」と、Bさんの口からときどき後悔の言葉が聞こえてくる。インドネシアでは公務員は理想的な仕事である。公務員になると、年金やいろいろな手当があつて、将来的にある程度安定した生活が保障されているからである。給料が想像していたよりも少なくても、毎月少しずつ送金をしているため、毎日節約をしなければならぬ生活を続けている。母国にいる家族がみんな期待しているので、諦めることは出来ない。Bさんの受け入れ病院では日本語学習の支援をしていないため、Bさんはボランティアで行われている日本語のクラスに週1、2回通っている。

### 3.2 キャリア形成の動機が強い候補者

家族を経済的に支援したいという理由だけでなく、技術を学び、帰国後に生かしたいというキャリア形成を目的として来日したインドネシアの候補者も多かったことが聞き取り調査で明らかになった。

#### 事例3. 病院に配属のCさん（男性、看護師候補者、28歳、未婚）

自分のスキルアップのために日本に来ようと思つたけど、国家試験の免許がないと看護師として働けないし、日本の最新の医療や看護の技術も学ぶことができないから、日本にいる意味がないと思う。

国家試験を2回受けて見たが、合格できなかったから帰国することにした。帰国して学校に進学するつもりである。2年間、日本の生活を試してみたが、日本はとてもいい国だと思う。いつか機会があつたら、日本の看護大学で日本の医療制度や看護の技術を学びたい。

Cさんは母国で自分のクリニックを経営している。日本の最新の医療や看護の技術を習いたかったため、EPAプログラムに参加することにしたという。日本で看護師として働いてみたかったからである。将来、日本で得た知識を母国で生かしたいという夢を持っていた。しかも、日本は先進国というイメージが強いから、母国に帰ったら周りの人から偉く見られるだろうと思っている。しかし、EPAの条件の中で

は、日本の国家試験の免許を取得しないと看護師としては働けない。日本の医療や看護の技術を学びたいとの意識が強かったCさんは結局、EPAでの研修・就労を打ち切って帰国することにした。

#### 事例4. 病院に配属のDさん（女性、看護師候補者、30歳、未婚）

海外で看護師として働きたかったので、EPAプログラムに参加することにした。実は来日する前、2年間ぐらいサウジアラビアで看護師として働いていた経験がある。日本での仕事については言葉は難しいけど、仕事はサウジアラビアよりもはるかに楽だと感じた。サウジアラビアの方が看護師のスキルを生かすチャンスがあるが、日本では自分の看護のスキルがあまり生かせない。

でも、少なくとも日本語ができるようになった。インドネシアには日系企業があるから、日本語が出来ると仕事の範囲が広がり、さらに、いろいろな国で働く経験があると思うので、いつか帰国したら、簡単に仕事を見つけることができると思う。

候補者は自分の夢や希望を抱きながら来日した。自分の夢や希望が叶えられない時、不満やがっかりした気持ちを感じるのは当然のことだろう。それぞれの来日動機によって、将来の見方が異なる。例えば、経済的な動機を持っている候補者たちは、家族を支援するために日本で働くことにした。母国にいる家族を援助しなければならないから、責任感が強く、どんなに海外で苦勞をしても自分は我慢して努力しようとする気持ちが強いとみられる。学歴と高い職位を持っていても、日本ではその資格が生かせず、技能低下が起こっても、まず家族のことが優先されるので、途中で諦めず、出来るだけ最後まで頑張り続ける傾向が強い。最初の目標が実現出来なくても、すぐに前向きになって、さらに新しい目標を立て、簡単に諦めないタイプであろう。

それに対して、個人的な動機、例えば、技術を学び、帰国後に生かしたいという自らのキャリア形成の一ステップのような動機を持っている候補者たちは、自分の目標が実現出来ない時

は、すぐに落ち込みやすいタイプだと思われる。最悪の場合は途中で諦め、帰国する可能性も高いと見られる。

### 3.3 家族の経済的支援とキャリア形成の両方を動機とする候補者

候補者の中には、2つの動機を同時に持っている人もいることが、聞き取り調査から明らかになった。

#### 事例5. 介護施設に配属のEさん（男性、介護福祉士、23歳、未婚）

3年間の看護学校を卒業したばかりで、自分のキャリアをのばすために海外で看護師として働きたいと思った。EPAの日本受け入れのことを聞いて、すぐに看護師の候補者として申し込みたかったが、2年間の看護師としての経験がないため、介護福祉士として申し込んだ。看護学校で得た知識を生かせるなら、介護福祉士としてでも日本で働きたいと決意した。私は10人の兄弟の長男（4番目）であるから、私の下にまだ幼い兄弟が6人もいる。家族の中で私は一番稼げるので、親の負担を減らすために、日本で自分のキャリア形成をしながら、家族のためにも一所懸命、仕事をしている。

上記の事例のように、2つの動機が密接に結びつくことにより、日本で働くことを決意したインドネシア人の候補者もいる。自分のキャリア形成をはかりながら、家族を経済的に支援している。インドネシアは大家族ということもあり、家族の間の精神的・経済的関係が強固である。インドネシア人にとって、親を支える義務は死ぬまでやらなければならないという規範があるため、子供が経済的に独立すると、まず親に恩返ししなければならないという観念が若者の間でも強い。

インドネシアでは、同じ家や場所で一緒に生活をしながら、血が繋がっていれば一生、家族の絆は強い。長男、長女に関わらず、経済的に余裕がある人が他の家族のメンバーの支えになる。家族のために外国に出稼ぎに行く人々の責任感は大変強い。そのため、どんなに海外で苦勞をしても、つらい目にあっても、前向きに

一生懸命に困難を乗り越えるように努力する傾向がある。インドネシアの家族制度を考えると、候補者の来日動機を考える際にも、個人と家族を切り離して考えることはできない。このため、Eさんのように、個人のキャリア形成と家族への経済的な支援が不離不可分のケースも多いとみられる。

## 4. まとめ

インドネシア人の看護師・介護福祉士候補者は、祖国での仕事を辞めたり、当面、家族と離れて暮らすなど、リスクを冒し、大きな不安を抱えながらも、日本で働くことを決断した。アンケート調査の結果も踏まえ、彼らにインタビューをした結果、「家族を経済的に支援すること」と「キャリア形成」はインドネシア人候補者が来日した主要な動機ではあるが、このうちの一つだけを動機とする候補者は少なく、程度の差こそあれ、その両方を合わせ持って来日した候補者が多いことが明らかになった。

定住化傾向という点については、EPAという制度のもとでは、限られた期間内に国家試験に合格しなければ定住化することはできないので、必ずしも候補者の意志だけで決定できるものではない。しかも、定住化するかどうかには複雑な要因が絡まっているため、安易に断定することはできない。

しかし、インドネシア人看護師・介護福祉士候補者の来日動機という観点からみると、定住化が起こりやすいのは、経済的な動機をより強く持っている人の方が多いのではないかとと思われる。彼らには母国にいる家族を経済的に支援する責任があるので、できるだけ長く外国で働き続ける意思が強いと考えられる。そのため、どんなに異国で苦勞をしても、努力をし、送金を続ける気持ちを持ち続けることができる。国家試験合格のような当初の目的が万一実現できない場合にも、他の目的やその国の魅力を見つけようとする前向き思考の傾向がある。

国家試験に合格して日本人の看護師や介護福祉士並みの収入が得られる場合には、日本に家族を呼び寄せる可能性もあるだろう。そこで家族での生活や子供の就学などが保証されれば、日本への定住化傾向は高くなると考えられる。インドネシア人看護・介護労働者の国際移動に

とって、家族がどのような役割や機能を持つのかについては、今後の研究で明らかにしたい。

また、技術を学び、自らのキャリア形成の1ステップのような動機を持っている候補者たちは日本で得た知識を母国で生かしたいという気持ちが強いため、日本での定住化傾向は弱いと考えられる。つまり、個人のキャリア形成という指向性を持っている候補者の方が選択の自由があるため、個人的な意思によって行動することが可能である。したがって、国家試験に合格したうえ、日本という国や職場に魅力があると思えば定住化する可能性が高いが、国家試験合格がインドネシアで看護師としての大きなステップアップになると思えば、それを誇りにして帰国をする可能性もある。

来日に際して2つの動機を合わせ持っている人は、人によって定住化傾向が異なると思われるが、その場合には家族状況が最も重要な要因になると考えられる。つまり、家族の経済状態があまり良くない場合には、「家族支援」のタイプと同様に定住化が起こりやすく、経済状態

が良い場合には「キャリア形成」タイプ同様、定住化は多くの選択肢の中の一つとなるのではないかと思われる。

### 謝辞

本研究は、九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト「日本の労働市場開放をめぐる国際社会学的研究——介護・看護分野を中心に」（2007～2009年度）（研究代表：大野俊）の助成を得て行われた研究の成果の一部である。

### 参考文献

- 安立清史, 2010, 「来日インドネシア人・フィリピン人介護福祉士候補者の実像」, 「東南アジアから日本へのケアワーカー移動をめぐる国際会議」(2月27日, 福岡市)での報告。
- 安立清史, クレアシタ, 2009, 「インドネシア介護福祉士候補生へのアンケート調査結果」, 「九州大学アジア理解講座・インドネシア人ケアワーカーを日本に迎えて」(5月23日, 福岡市)での報告。